

アビダルマ・ディパに言及された
サーンキヤ説について

山下幸一

サーンキヤの学説は、*Īśvarakṛtsna* によって *Sāṅkhya-kārikā* (SK) に纏められる以前に、長い時代に亘る、そして多分複雑な思想史を有っていた。しかし SK 以前のその学説は、断片的に処々の文献に見出されるのみで、全体像を把握することができない。できることといえば、かかる断片を全て蒐集、整理し、幾分たりにとも全体像に近いものを完成させる作業である。

ところで、その断片的にしか知られないサーンキヤ説の或るものがヨーガ学派の成立に多大の寄与をなしたと考えられるようになった。すなわち *Pañcasiṅha*, *Vātsāganya*, *śūnyo Vindya-vāsin* と続く学系が想定され、その流れの上で *Paṭanjali Yoga-sūtra* (YS) は *śūnyo Vyāsa* の *Yoga-bhāṣya* (YBh.) を位置づけるのである。

さて、仏教文献には、仏教の論争相手の一つとしてサーンキヤ派が頻繁に取り上げられている。本稿に關係ある例として *Abhidharmakośa-bhāṣya* (AKBh.) に於いては、サーンキヤの論師として *Vātsāganya* の名が見られる^①。そこには SK が伝えるものとは異なる学説が保存せられている。

説一切有部に於いて AKBh. に批判的である *Abhidharma-dīpa-vibhāṣāprabhāvatī* (ADV.) は AKBh. に於ける *śūnyo Vyāsa* のサーンキヤ説を取り扱っている。本書校訂者 P. S. Jaini の付

した *Indexes* によれば *Sāṅkhya* (p. 4, 31, 106, 149, 267, 268, 273, 416), *Vātsāganya* (p. 259), *Vindya-vāsin* (p. 35), *Kapila* (p. 398) などの名称が見られるし、その他にもサーンキヤ説と見当づけられることができるもの (p. 366) が発見されている。

本稿の筆者は YBh. に至るヨーガ学派成立史を探索する一助として ADV. に言及されたサーンキヤ説を可能な限り明らかにし、それを本年度の研究報告としたいと考えている。

さて、右に列挙した ADV. におけるサーンキヤに關説する箇所の内容は、次の二つに大別することができる。第一に *Sāṅkhya* なる名称を出すのみで具体的に学説内容を述べないもの、或はごく一般的知見しか得ることのできなないもの。第二に、ある程度具体的に学説内容に説き及ぶものである。

この二大別に従って、以下に個々の箇処に検討を試みることにする。なお、それぞれの箇処の訳文は、紙数の都合上省略する。《1a》(ADV. p. 31, ll. 21-27) *śūnyo* 「勝因 (*pradhāna*) と称せられる唯一の種子」という句を見出す。これは勝因を唯一の原因だとするサーンキヤの因果論に一般的な事柄である。

《1a》(p. 149, ll. 1-4) *śūnyo* について、因つある業と果つある煩惱との同一性を認めるならば *Sāṅkhya* などの見解を支持することになると言われる。このような業と煩惱が同一だという説は SK. には見出せない。しかし YS. II. 12 には、「業の潜在力は煩惱を根本としており、云々」とあって、ヨーガ学派への接近がうかがわれる。

《1c》(p. 398, ll. 4-9) *śūnyo* は *Kapila* とするサーンキヤの開祖の名前のみが出ている。

《1c》(p. 416, ll. 12-15) *śūnyo* *Sāṅkhya* とする名前だけ

が見られる。

《11a》(p. 4 *U.* 3-22) 同じ次の如きサーンキヤ説を抽出できる。すなわち、三要素 (tri-guṇa) の不均衡から現象世界が顕現する。業が共通する勝因におきて作され、多教の靈我 (puruṣa) に提供される、ところがものである。これはサーンキヤに一般的なものである。

《11a》(p. 35, *U.* 8-12) 同じおぼろげ「諸根が通行してゐる」ところが Vidyavāsin の説が批判されている。かかる説は Yuktī-clīpikā (p. 91, Pandeya ed.) に於いても彼のものとされている。《11c》(p. 259, *U.* 7-16) 同じおぼろげ「いわゆる四大論師の一人法教の説を紹介し批判する。AKBh. (p. 297, 1. 4) では「転変論であるから」という理由でサーンキヤ説に与する、とのみ言われている。それに比較して、ADV. では「それぞれに異なる分位を相とする転変」という具体的な理由を述べて、法教を Vārsaganya と同一だとしている。かかる転変説は、既知の Vārsaganya の断片に見出すことはできない。しかしながら、YBh. II. 13 には右の如き転変論があつて、それは SK. の問題にしないことが出来る。^④

《11d》(p. 267, 1. 4-p. 268, 1. 14) この箇所から次の二つのサーンキヤ説が抽出できる。すなわち、「眼は勝因から到来し、そして同じそこへまた帰入する」というのと、「唯一の原因が常住であり、自己の類を捨てて、それぞれの特殊な変異を本質として、それぞれかつて存在して、それぞれ他の特殊な結果を本質として転変する」といふものである。^⑤ 右の二つは、pradhāna (ekahī karanam, nityam) → vikāra-viśeṣa → kārya-viśeṣa (= cakṣus etc.) というものになる。このやうな転変説は、^⑥ ヨーガ派

にもサーンキヤ派にも、そのまゝの形で見出すことはできない。ただ YS. I. 45, II. 19 における aliṅga → liṅga → viśeṣa → viśeṣa という転変説に何らかの関連があるように思われるのである。

《11e》(p. 273, 1. 29-p. 274, 1. 4) 同じおぼろげ「存在しているもののみが生じる。譬えば、牛乳の中に酪が存在しているように、結果と原因とが同一であるから」、いうサーンキヤ説を挙げて反論を加えている。がこれはサーンキヤ説に一般的な因中有果論をいうそれ以上のものではな。

《11f》(p. 106, *U.* 1-12) 同じから抽出できるサーンキヤ説は、常住なる有法が自己の性質をもつて存在する法として転変する、^⑦ というものである。この dharmin-dharma のやうに図式化される転変説は、SK. のあすかり知らないもので、YBh. に伝承される説である。^⑧

以上で ADV. において言及されたサーンキヤ説は、尽くされるであろう。論師の個人名を挙げるもの以外は、ADV. が著わされた当時行なわれていたサーンキヤ説であろう。これら断片的サーンキヤ説から判断するに、ADV. の作者は SK. を知らない。知っているのは、おぼろげ、今は文献の伝わらなう Vārsaganya, Vidyavāsin の系統の、^⑨ 即ち YBh. へと伝承されるサーンキヤ説であろう、^⑩ ということができるのである。

- ① 田村庄司「世親に知られた教論説」(印仏研13—2、1—3
〇—1—13—1—13) ② Cf. Jaini's 'Introduction' to
AD, p. 89 'Criticism of the Saṃkha.' ③ 高木神元
「雨衆外道について」(1) (密教文化第六三号) ④ 拙稿
「ヨーガ哲学における転変と時間」(仏教学セミナー第二九
号) ⑤ 前掲拙稿